

いま、何故徒手乱取なのか

2018年6月28日

JAA 教育局 徒手乱取研究委員会

委員長 嶋田典弘

短刀乱取りが始まってから50年が経ちました。徒手乱取において、間合いが近接し過ぎたために柔道家などからの批判を受け、富木謙治師範は短刀を用いることを考案されましたが、短刀技術の変容に伴い、短刀乱取りにおいても間合いが近くなってしまい、近年では短刀乱取り本来の精神が失われたように感じています。

いま、何故徒手乱取りなのか。

それは合気乱取り法の理想を目指すとともに、徒手乱取りを想定して作られた稽古体系を見直す契機となるからだと考えています。掌底合わせ、手刀合わせ、手刀の崩しといった基本稽古から、17本の形へと進み、掛稽古、引立て稽古を通じて実力を養う稽古体系は徒手乱取りを想定されています。短刀乱取のための稽古体系ではありません。

ただし、徒手乱取りの実施が最終目的なのではなく、あくまでも合気道の実力を養う手段の一つだと捉えています。個人的な経験では、徒手乱取りの研究を通じて、「全力で技をかけても怪我をさせない」ように作られている乱取り17本の形の理解が進むようになりました。古流の形、たとえば第六の形の柔らかい動きを身に着けることが、徒手乱取り及び短刀乱取りに生きてくることも感じられるようになりました。また、徒手乱取りの稽古を積むことで、短刀取りには短刀乱取りの良さがあることも再認識出来ました。短刀を捌いてからの刹那の攻防による短刀乱取が行われることを願って止みません。

今回作成したルールでは間合いの近接を防ぐために、「当身あり」などの工夫を取り入れています。たとえ徒手乱取りのルールをどれだけ精緻に作り上げても、競技者や審判が競技の精神を忘れて、勝敗を重視し過ぎれば、歴史は同じことを繰り返します。競技者は試合を楽しむことが第一ですが、同時に競技の精神を体現することを目指してもらいたく、よりよい合気道競技の実現を目指す「研究」を徒手乱取研究委員会の役割として、今回の研究大会を企画しました。

本大会では、徒手乱取りの研究を通じて得た、合気道競技の本質とは何かについての解説や稽古法を道友の皆様に紹介させて頂き、実際に徒手乱取りの試合も行います。徒手乱取りのための稽古を十分に積んでいない段階での試合ですし、そもそも富木師範ですら成しえなかったことを行うのですから、最善を尽くしたうえで、それでも失敗は覚悟しなければなりません。真剣勝負を促す試合は貴重な実践研究であり、その結果を受けて、ルールや稽古法の改善を続けてまいります。

先に短刀乱取りのルールを改善すべきとのご意見もありましたが、今行われていることを変えるのは相当の労力がいますし、影響が大きいと、全く新しいものとして徒手乱取りを研究する中であるべき合気道競技に対する理解を進め、体現出来るようになった段

階で短刀乱取りルールに還元することを考えております。

今回の勝浦での研究大会は徒手乱取りのためだけに終わるものではなく、定期的に道友が集まり、JAA の研究成果を発表するとともに、道場の内外で意見を交換して、合気道と互いに対する理解を深める場に発展出来ればと考えております。

最後に、合気乱取り法（柔道第二乱取り法）の再構築は、これからの富木合気道を考えたとき、富木・大庭両師範の想いや教えを知る世代が現役でいるうちに成し遂げなければならぬことの一つだと考えています。

皆様にはご理解とご協力を賜りたく、よろしくお願い致します。

以上